

埋文

とやま

Toyama Prefectural Center for Archaeological Operations

2022.12.27

VOL.

161



小竹貝塚出土品（富山市呉羽）
《骨角器（弭形角製品）》

小竹貝塚から出土した、^{ゆはす}弭形角製品とその未成品です。ニホンジカの角の先端を切り取って溝を彫り、内側をソケット状にくりぬいて作られています。「弭」とは、弓の両端の、弦をかける部分のことです。これに弦を結び付け、弓の両端にかぶせることで、弓に弦を装着したと考えられます。

とっておき埋文講座 ● 特別展「金属から見る富山の歴史～こがね・しろがね・あかがね・くろがね・あおがね～」

● 古墳時代の軍事と外交

Center Flash ● とやま埋文友の会

古写真発掘！ ● 日の宮・道林寺遺跡（日の宮遺跡C地区） 小矢部市蓮沼

富山県埋蔵文化財センター

特別展「金属から見る富山の歴史」

～こがね・しろがね・あかがね・くろがね・あおがね～

とっておき埋文講座①

金属に焦点をあてた展示

私たちの身の回りには、ハサミやカッター、アクセサリーなど、たくさんの金属製品があります。建築部材や家具、調理器具にも金属が使われており、今や金属はなくてはならない重要な物質です。これら金属製品は考古学的にルーツを辿ると、もともと土器や石器、木器、骨角器だったものが、どこかの時点で素材が金属へ置き換わってきたことに気づかされます。

今回の特別展はこのような視点で遺跡から出土した金属製品に焦点を当て、富山の歴史を紐解くものです。

展示室の入口は、世界遺産である島根県の石見銀山の坑道を模して作ってみました。トンネルを潜り抜けるワクワク感を感じていただけたでしょうか。



坑道を模した導入部

金属との出会い

人類が最初に加工と生産を始めた金属は銅で、紀元前7,000～8,000年頃と言われています。金と銀はそのまま自然界に存在する金属ですので、更

に古くから使われてきたようです。一方、鉄の利用は紀元前1,500年前後からです。鉄は融点が高く製錬には高度な技術が必要なため、当初は製錬が不要な隕鉄^{いんてつ}を利用していました。当時、硬く強い鉄の武器が戦を有利に導いたことは有名です。

富山県では弥生時代後期から金属器が出土し始めます。



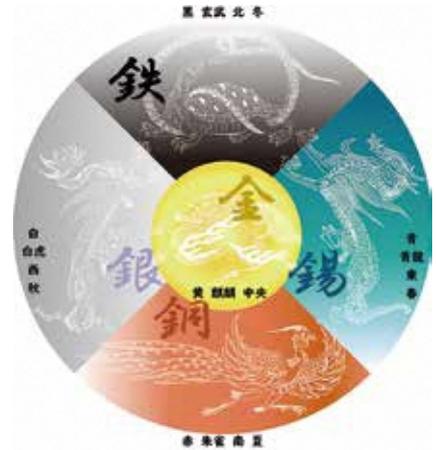
上：隕鉄（カンポ・デル・シエロ隕石）

下：鉄短剣（射水市^{やが}壺山遺跡／弥生時代後期）

ごきん 五金とは

工芸品などに使われる代表的な5種の金属を五金といいます。サブタイトルにもなっている金（こがね）、銀（しろがね）、銅（あかがね）、鉄（くろがね）、錫（あおがね）をさします。

五金という考えは古代中国の五行^{ごぎょうし}思想に由来します。五つの金属が、麒麟、白虎、朱雀、玄武、青龍といった伝説の神獣^{しんじゅう}や色、方位、季節などと結び付けられ理解されてきました。展示では、それぞれの関係性が一目でわかるようなパネルを作り、五金それぞれの鉱石と一緒に掲示しました。



五行説と五金についての説明パネル

色々な金属製品

展示では、金属製品を「生活用具」「装身具」「武具・馬具」「農具」「信仰用具」「銭貨」の6分野に分けて配置しました。また絵巻物やイラストを使い、どのように使われた道具なのかが一目でわかるような工夫をしました。

生活用具のコーナーでは、鉄鍋、鉄瓶、箸、匙、針、鋏、錠前、分銅、火打金等を紹介しました。これらは暮らしの中で身近な道具で、理解しやすい出土品です。中でも鉄鍋は金属の特性である熱伝導性と丈夫さを兼ね備えた調理具で、11世紀頃からそれまでの土器製から鉄製へ素材の変化が起きました。展示では変遷がわかるよう、鉄鍋を奈良・平安時代の土師器鍋や縄文土器と共に配置しました。



生活用具のコーナー

装身具では、縄文時代の石・骨角製装身具に始まり、金属が一部の指導者の占有物であった古墳時代や、道具で身を飾らない奈良・平安時代を経て、広く庶民が金属製装身具を持つようになった中近世への変化を追いました。古墳時代の金環や銀環のほか、当時の化粧法や髪形が想像される中世のお歯黒皿（鉄漿皿）や毛抜き、笄、簪等の出土品が注目を集めました。



左：金環（高岡市桜谷古墳群／古墳後期）
右：鉄漿皿（南砺市梅原胡摩堂遺跡／中世）

武器・馬具として主に使われた金属は鉄です。鉄は強靱さと鋭利さを併せ持つ素材で、古墳時代以降、最先端の技術で武器に加工されました。県内の古墳から、副葬された鉄刀や鉄剣、挂甲等が出土しており、当時の緊迫した政治的・軍事情勢がうかがえます。



武器・馬具のコーナー

農具にも鉄が多く使われました。鍬や鋤など強靱な鉄製農具が広く使われるようになった古墳時代には、田畑の開墾や古墳の造営が盛んに行われました。以降鉄製工具は、林業や漁業、工芸などあらゆる分野の技術を大きく発展させました。

信仰用具のコーナーでは、古墳から出土したいわゆる「三種の神器」に通

じる鏡や剣をはじめ、古代～中世の仏教や密教、末法思想や山岳宗教などさまざまな思想や宗教の伝播に伴って、象徴的に用いられてきた金属の道具を多く展示しました。



経筒・和鏡・経筒外容器
（上市町京ヶ峰経塚／平安時代）

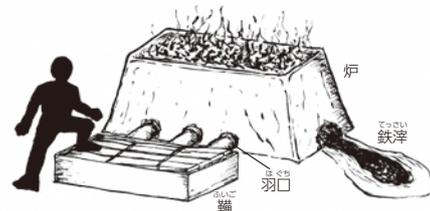
銭貨では、和同開珎や渡来銭、明治政府が発行した銀貨など、日本における銭貨の大きな変遷が追える資料を展示しました。和同開珎は和銅元（708）年に律令国家の成立を国の内外に示す象徴として鑄造されたお金です。中世では死者が三途の川を無事渡れるよう銭を棺に入れる風習（六道銭）も生まれました。



左：和同開珎（氷見市惣領浦之前遺跡）
右：六道銭（射水市安吉遺跡／中世）

加工の技術

富山県中央部の射水丘陵には、かつて製鉄炉や炭焼き窯等からなる一大生産地が広がっていました。展示では、出土した砂鉄や炉壁、炉外流出滓と共に、製鉄炉の写真や解説イラストを配置し、製鉄の一連の工程がわかるよう工夫しました。



箱形製鉄炉の解説イラスト

鑄造技術を示す鑄型も多く出土しています。中でも懸仏の鑄型は実物を用いて型起こし実験を行っており、仏様の繊細な表情や細密な彫り込みが再現出来た事例として特筆されます。



左：復元された懸仏
右：懸仏の鑄型（富山市友杉遺跡／12世紀代）

屋外展示の北高木遺跡の遺構切り取り標本も、迫力満点と大好評です。通常は砕かれてしまう鍋や釜の鑄型がまとまって出土した珍しい遺構を、往時の姿で見ることが出来ます。



鑄造関連遺構
（射水市北高木遺跡／14世紀中頃）

鉱山を探せ！

金属探知機を使って鉱山を探し、楽しく学べるコーナーです。令和4年度博物館実習生が考案しました。実習生が製作した1/3縮尺模型もホールに展示していますので、是非ご覧下さい。

（朝田亜紀子）



「日本の鉱山を探せ！」立体教材

古墳時代の軍事と外交

とっておき埋文講座②

山口大学客員教授 田中 晋作

はじめに

本日は「古墳時代の軍事と外交」というテーマで、古墳時代中期の政権勢力(大阪府 百舌鳥・古市古墳群の勢力と富山・石川地域に所在した諸勢力との関係、また朝鮮半島への軍事的関与について、当時の甲冑(よろい・かぶと)を使って、武器に関する法則をキーワードとして織り込みながら紹介したいと思います。

ところで、武器はよりすぐれた武器が生み出されると、古くなったものから順次廃棄、更新されていく運命にあります。戦国時代や幕末維新期、さらに第二次世界大戦のことを思い浮かべてください。想像を越える量の武器が製造されながら、よほど特殊な事情がない限り後世にまでその姿をとどめることはありません。

その中であって、当時の武器が高い比率で現代にまで残されているのが古墳時代です。意外に思われるかもしれませんが、これは古墳時代がさまざまな器物を古墳に副葬するという、特殊な習慣をもった時代であったからです。考古学が古墳時代の武器や軍事に関する研究で、大きな成果をあげてきた理由がここにあります。

大量の武器を必要とした社会

さて、古墳時代に入り、有力古墳の副葬品が鏡(玉類)+武器+鉄製生産用具を基本にして構成されるようになります。権力や支配の正当性を示す象徴:鏡(玉類)、これを保障、担保する武力:武器、これらを支える生産:鉄製生産用具を膝下におさめた首長の姿が写しだされているといってもよいと思います。このことは、権力や支配の実効性を保障、担保するうえで、武器:武力がきわめて重要な役割を果たしていたことを物語っています。

古墳時代中期(5世紀)に入ると、大量の武器が古墳から出土するようになります。その核をなすのが甲冑です。現在知られている前期の短甲(上半身を防御するよろい:4世紀半ば~後半)は可能性を含め25例、これに対して中期の短甲(5世紀)は600例におよびます。また、中期の甲冑は、図1からもわかるように繰り返し改良が加えられています。このような現象に「武器の生産量と発達速度は、その時代の社会情勢を反映する」という法則をあてはめると、中期の社会は前期に比べ大量の武器を必要とする高い緊張状態にあったことが導き出されます。当然のこととして、攻撃用武器である刀や剣、鉾や鉄鏃においても同様の現象がみられます。

ところで、これまでも、また現在でもそうですが、「各時代における最新の知識や技術は、まず武器に採用される」ことが知られています。古墳時代の武器の製造についても同様で、素材を含め、その知識や技術を保持していた人びとによって独占されていたと考えられています。中期には、当時の政権を担っていた百舌鳥・古市古墳群の勢力のもとで一元的に開発、製造されていたことが

これまでの研究で明らかになっています。

一方で、甲冑の分布は、両古墳群を中心にして、北は福島県、南は鹿児島県までの広がりをもっています。ただし、その分布は一様ではなく、強い偏在性がみられます。武器の供給は、大きなリスクを伴うことでもあり、「最新の武器には自由な流通がない」ことから考えると、その製造を担った両古墳群の勢力にとって必要な、あるいは重要と考えられた勢力を対象にして供給されていたことがわかります。

富山・石川地域での甲冑出土古墳

以上のことを踏まえ、富山・石川地域での甲冑出土古墳をみると、中期前半の甲冑をもつ小矢部市谷内21号墳や羽咋市柴垣円山1号墳の存在から、百舌鳥・古市古墳群の勢力の力が西から段階的に進んでいくのではなく、一気にこの地域にまで及んだことがわかります。さらに、これらの地域には、中期後半の氷見市イヨダノヤマ3号墳や同加納南9号墳が存在することから、そ

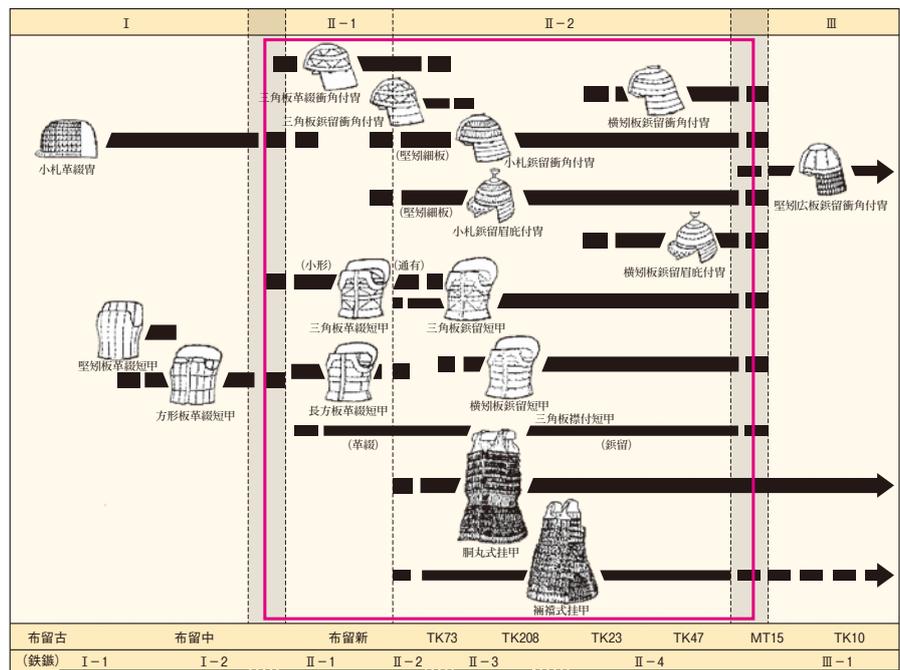
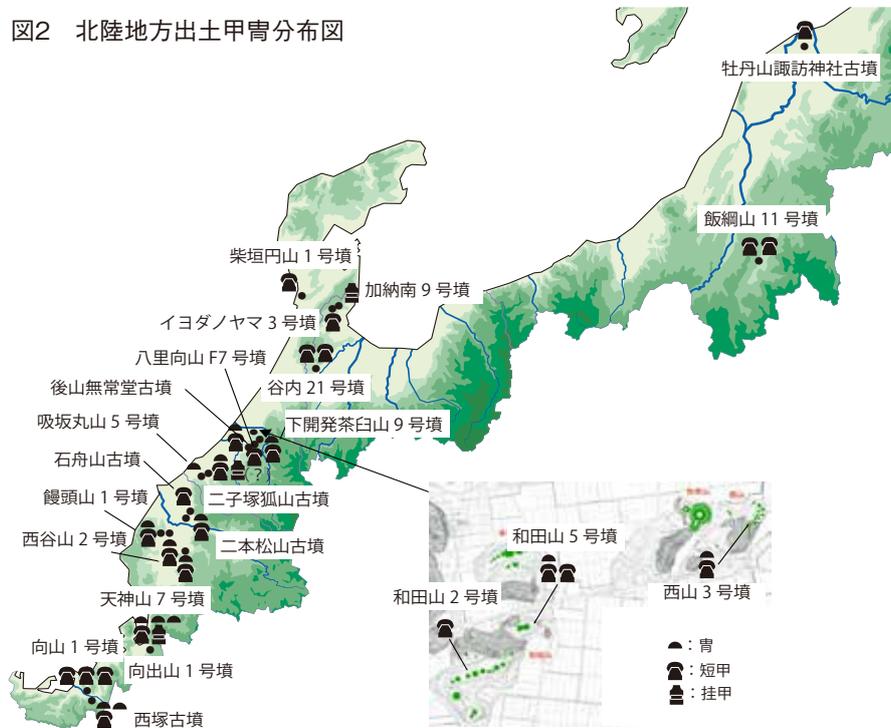


図1 古墳時代の甲冑変遷図

図2 北陸地方出土甲冑分布図



の関係が中期をとおして継続していたと考えられます。

また、石川県能美地域では、中期半ばに能美市下開発茶臼山9号墳が出現し、さらに同和田山古墳群2・5号墳などと、中期後半にいたるまで甲冑の供給が継続しています。これに加えて、中期後半には、その西に位置する加賀市二子塚狐山古墳や同吸坂丸山5号墳でも甲冑の出土がみられるようになります。甲冑を受容する拠点的地域：勢力が形成され、百舌鳥・古市古墳群の勢力の力がより広く、より深く浸透していった様子がみてとれます。とくに、甲冑の供給は、地域首長墳とともに小規模古墳がその対象になっていることが注目されます。

以上のような甲冑のひろがり、これを受容した地域勢力が、両古墳群の勢力と政治や軍事の面で利害を共有する密接な関係にあったことを示しています。これらの地域勢力は、両古墳群の勢力との関係を背景に、それぞれの地域において優位な立場を占めるようになったことでしょう。しかし、その一方で、軍事を含め、両古墳群の勢力から強い制約を受けることになります。

ただし、このような関係は、両古墳群の勢力側からの一方的な見方だけでは十分ではありません。たとえば、古墳時代の社会が求めていた「鉄」です。当時の日本列島は、これを朝鮮半島に全面的に依存しており、その輸入ルートを

握っていたのが両古墳群の勢力です。地域勢力にとって鉄の入手は喫緊の課題であり、両古墳群の勢力との太いパイプはどうしても維持しておかなければならないことでもありました。地域勢力側のしたたかな計算も見え隠れます。

農工具が組み込まれた武器組成

中期半ば以降、畿内およびその周辺地域では、甲冑を核にして刀や剣、鉾や鉄鎌といった組成として整った武器の副葬に特化した古墳が出現してきます。その中に、少量の斧や鎌、鉾などといった農工具を甲の中に入れて副葬する古墳がみられるようになります。これらの農工具は、その被葬者が各種生産への関与を象徴する目的で副葬されたのではなく、農工具を含んだ武器組成の存在を示していると考えています。

このような副葬品の構成と出土状況については、時期が大きくなりますが、奈良時代の養老律令軍防令備戎具条に規定された律令軍の武装装備につづるものがあるとする指摘があります。本条では、武器以外に移動や駐留に必要な農工具などを装備するように規定しています。これは、律令軍が攻撃を主目的とする侵略的軍隊として編制された軍事組織であったからです。このことを参照すると、農工具を含んだ武器

組成をもつ勢力は、遠距離、長期間の移動や駐留を伴う軍事活動にも対応できる軍事構成員として生まれてきた可能性が考えられます。このような武器組成の出現は、「武装の内容や軍事組織の編制は、軍事行動によって解決されなければならない課題によって決定される」という法則から説明することができます。

富山・石川県域では、現在のところ加納南9号墳・イヨダノヤマ3号墳・小松市八里向山F遺跡7号墳・和田山2号墳・吸坂丸山5号墳でこのような出土状況がみられます。これら5古墳は、最大が長径25m・短径21mの円墳：イヨダノヤマ3号墳、最小が径15mの円墳：吸坂丸山5号墳で、いずれも中期後半に築造された小規模古墳です。それぞれの出土状況をみてみると、たとえば八里向山F遺跡7号墳では、刀1・剣1・鉄鎌34とともに、鎌1・斧大小各1・U字形刃先1・鉾1・鑿1を内部に入れた短甲が出土しています。また、和田山2号墳では、短甲内から斧1・砥石1が馬具一式・鉾1・管玉1とともに、加納南9号墳では、挂甲の内部から鉾1と斧1が出土しています。このように、これらの古墳では、いずれも甲冑あるいは甲を核にした刀や剣、鉄鎌で構成され、これに少量の農工具が伴っています。ところが、農工具には、種類や数量に違いがみられ、すべてについて農工具が組み込まれた武器組成としてみることに異論が出るかもしれません。しかし、少なくとも各種生産への関与を象徴する農工具として副葬された可能性は低いものと判断しています。

むしろ、このような事例は、畿内および

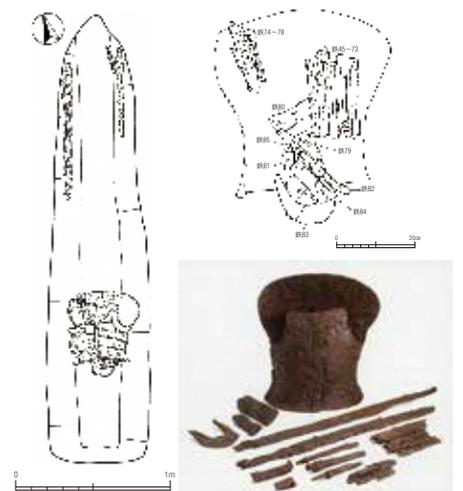


図3 八里向山F遺跡7号墳遺物出土状況

図4 谷内21号墳出土
長方板革綴短甲



びその周辺地域や富山・石川県域だけに限られたものではありません。また、短甲内に入れられているという条件を除けば、少量の農工具が甲冑を核にした組成として整った武器とともに出土する事例は、中期後半の日本列島各地で数多くみられることです。

ここでは、中期半ばから後半の畿内およびその周辺地域で生じた変化、すなわち、軍事構成員としての役割を担うために生まれてきた古墳被葬者が、富山・石川県域においても同様に認められるという点に注目したいと思います。富山・石川県域にも移動や駐留を伴う軍事活動に対応できる、あるいはこれに加わった勢力が存在していたことを示していると考えます。両古墳群の勢力のねらいは、実動部隊の中核となる中小規模勢力の直接掌握にあったと考えられます。

東アジア情勢への軍事的対応

ところで、古墳時代中期の軍事的特徴として、つぎのふたつのことがあげられます。ひとつは、これまで述べてきたように、政権勢力である百舌鳥・古市古墳群の勢力が、大きなリスクをおかしてまで形状が統一された最新の甲冑を富山・石川県域をはじめ各地域の勢力に供給したことです。もうひとつは、堅牢な防御施設を備えた城塞や領域境界線上に防衛ラインとなるような軍事施設が、当時の日本列島でみられないことです。

まず、統一された武器での武装は、軍事組織を編制する上で重要な要件のひとつですが、とりわけ攻撃を主体とす

る軍事組織で強く求められることです。つぎに、防御施設や境界線上に防衛ラインがみられないことは、列島内の諸勢力間に深刻な軍事的対峙がなかったことを示しています。ということは、このような軍事的特徴は、列島内での軍事的課題によってではなく、列島外の軍事的課題に対処するために生じたこととなります。つまり、甲冑の供給は、朝鮮半島を対象とした計画的で、長期間にわたる大規模な軍事活動に必要な動員を可能にする条件を整えるために行われたと考えられるのです。

4世紀に入り、中国西晋の滅亡は、東アジア世界に大きな混乱と高い社会的緊張をもたらし、同時に周辺の諸民族に古代国家形成への足がかりを与えることになりました。369年、半島では、高句麗と百済との間で高まっていた緊張が軍事的衝突に発展します。

前期後半、半島東南部地域域の勢力との間に成立した新たな関係は、中期には百舌鳥・古市古墳群の勢力のもとで、半島を対象にした計画的で、長期間にわたる大規模な軍事活動を伴う関係へと拡大していきます。両古墳群の勢力は、高句麗と百済との軍事的対峙という深刻な情勢を利用して、半島に対する発言力の強化やさまざまな利権の獲得をねらった、高度な政治的判断にもとづいた外交を展開していたのではと想像しています。甲冑の供給を行った両古墳群の勢力の真のねらいは、この外交課題への対応を保障する、大規模な軍事組織の編制と運用にあったのだと考えます。今回対象とした富山・石川県域の諸勢力が、列島各地の勢力とともに、両古墳群の勢力のもとで、直接、間接的にこの軍事活動に関与することに

なったことがこのような現象となって現れたのだと考えます。

おわりに

今回取り上げた甲冑は、平安時代に出現する大鎧のような華麗さも、戦国時代の当世具足のようなきらびやかさも、黒漆を塗って仕上げただけの質実な甲冑です。私は、少し大げさな表現ですが、このような甲冑で武装した集団を「漆黒の軍団」とよんでいます。今回紹介した軍事的集団の存在を背景に、百舌鳥・古市古墳群の勢力によって主導された対外的な軍事活動は、政権への求心力を高めるとともに、古代国家の形成を強く牽引していくことになったと考えています。

(令和4年10月23日

第3回 県民考古学講座)



図5 復元甲冑

【挿図引用】

図2：地形ベクトル分布図：小松市埋蔵文化財センター・和田山古墳群分布図：能美ふるさとミュージアム案内リーフレットを使用して作成。

図3：出土状況図面：報告書より、出土資料写真：能美ふるさとミュージアム案内リーフレットより。

図4：氷見市立博物館『コシの軍団』より。

図5：関西大学博物館『博物館資料図録』より。

とやま埋文友の会

当センターでは、展示及び普及事業に積極的に参加し、郷土の歴史や文化財への理解を深めていただくとともに、会員相互の親睦と交流を図っていただくことを目的に「埋文友の会」を設立し、平成16年4月から活動を行ってきました。会員の募集は毎年3月から行っていますので、興味のある方、考古学や歴史の知識を広めたい方、奮ってご入会ください。お待ちしております。

活動

- ① じっくり講座
- ② 遺跡探訪バスツアー(日帰り)
- ③ 会報「友の会ニュース」の発行

上記は会員向けです!

特典

- ① 当センター発行の展示図録・所報が届きます
- ② 当センターが行う展示の案内が届きます
- ③ 当センターが行う県民考古学講座の案内が届きます
- ④ その他県内外の考古学情報などが届きます

冬のじっくり講座のようす
令和4年11月19日(土)開催



会費

年1,000円(年度途中の入会でも会費は同額となります)

会員の期間

4月1日もしくは入会した日から、翌年3月末まで

問合せ

富山県埋蔵文化財センター 友の会担当まで

アラカルト



実はすごいぞ! とやまの遺跡 投票結果発表!!

みんなが投票してくれた、「日本一のとやまの遺跡」上位3位を紹介するぞ。君が投票した遺跡は何位じゃったかのう。



1位 (163票)	2位 (159票)	3位 (152票)
朝日貝塚	加賀藩主前田家墓所 (前田利長墓所)	大境洞窟住居跡
氷見市朝日丘	高岡市関町	氷見市大境
		
・日本で初めて、縄文時代の竪穴住居跡が見つかった。	・日本一規模の大きい大名の墓所	・日本で初めての、洞窟遺跡の調査 ・縄文土器と弥生土器のどちらが古いかわかった。

古写真発掘!—《15》



ひみや どうりんじ 日の宮・道林寺遺跡 (日の宮遺跡C地区) 昭和51年(1976年)撮影 小矢部市蓮沼

日の宮・道林寺遺跡は、小矢部市植生地区にあり、小矢部川とその支流である渋江川が合流する左岸の標高40～50mの河岸段丘上にあります。

植生地区一帯で昭和48(1973)年度～昭和51(1976)年度の間で計画された団体営ほ場整備事業に伴って、この地域で多くの遺跡が発掘調査されました。

この地区には、畠山氏の守護代である遊佐氏の居城とされる「蓮沼城」も含まれ、周辺には中世の遺跡が広がっています。

今回紹介するのは、当時「日の宮遺跡C地区」として調査したものです。この地区からは、中世の多くの建物の柱穴跡、溝跡の他に19もの井戸跡が見つかり、その内の一つの井戸から漆器椀5点、鉄鍋破片、折敷、桶等が出土しました(下写真)。他の井戸からも多くの木製品が出土しました。

左上の写真は、日の宮遺跡C地区の発掘調査区の全景です。左下の写真は「遣り方測量」という方法で遺構の位置や高さを実測している風景です。木の板を水平に巡らせ、水糸などで升目を組み、人の手で実測します。現在では、ヘリコプターやラジコンヘリ、ドローン等で撮影して図化しますが、当時はこのように全て手作業でした。



漆器椀と桶(奥)と鉄鍋(手前)の出土状況

編集後記

先日のサッカーW杯では、日本代表の驚きの活躍を見せてもらい、来年に向け元気をいただきました。来年といえ、当センターでは2月4日から、県内の最新の発掘調査の成果を展示する、「市町村連携発掘速報展」を開催します。ぜひ考古学の新しい発見や驚きも見に来て下さい。ご来館をお待ちしています。(担当 善徳)

富山県埋蔵文化財センターニュース「埋文とやま」VOL.161

令和4年12月27日発行 編集/富山県埋蔵文化財センター 〒930-0115 富山市茶屋町206-3 TEL.076-434-2814
URL <https://www.pref.toyama.jp/3041/miryokukankou/bunka/bunkazai/maibun/index.html>

